

ウエトラブ

2

ウエトラブは2012年2月設立の「ルーキー・ベンチャー」ながら、本物そっくりの手術練習用疑似人体モデル製造で、急速に存在感を高めている。歯科技工士として義歯製造などに携わってきた社長の岡野仁夫は、再生医療や高度医療

化時代の到来を見据えた臨床外科医をターゲットにした手術練習用のポリビニルアルコール（PVA）製品に今後の会社の運命を託している。

アナログ手法

ヒトの生体組織の物性や形状はバラつきが大きく、標準化するためのモデリングは困難だ。これ乗り越えるために岡野がとったのは「匠の技術とアナログ手法」だ。

疑似人体モデルで存在感



吻合したPVA製疑似胃袋の注水試験

た軟らかさ、引つ張り強度があり、吻合・縫合練習が臨場感をもってできる。

一方で岡野は「本物感を持った疑似生体モデルをつくるために、専門分野で経験と実績がある著名

ウエトラブは水分比率を自在に調整して、臓器や骨の形に合わせ立体成形できる技術を生体適合性の高いPVAを主材料にして確立した。生体の物性に酷似し

メーカーの研修センターにある手術室に、岡野はほぼ毎週末赴き、医師から情報収集を繰り返した。

ノウハウ築く

人体同様の物性を実現するために、PVAの材料

配合と成形の技術が重要。いったん材料の組み合わせと成形過程を確定できると、後は熟練工ではないパート社員がつくっても安定した品質で疑似生体モデルを大量生産することが可能な製造ノウハウを築き上げた。岡野がウエトラブを発売させる前の歯科技工士の

な複数の医師から直接、意見を集約して物性を改善するアナログ的な手法をとった」と説明する。年間約60001万人の医師が研修に参加する医療デバイス

ころを含めると、17年かけて確立したことになる。

早期に特許取得

その上で岡野がしたかかったのは、PVA製品の特許取得を怠らなかつたことだ。臓器、血管、練習用シート、刃物の切れ味を検査するシートなど、現時点までに国内の基本特許を7本成立させている。米国や

欧州向けも出願中で、今後16件程度の特許出願を計画している。「材料の分析をしたが、本物の質感を出してコストも抑えるにはPVA材料を使う以外に手がないはず」と岡野は見通す。高収益体質に結び付けるために、自社のシェア拡大が肝要にな

る。基本特許取得が新規参入企業の参入障壁を高めているが、それでも素知らぬ顔で類似PVA製品を仕掛けたら、ウエトラブの製品をあたかも自社開発と訴えて販売したりする企業が現れ始めているという。

岡野の対処法は素早かつ確だった。それが人材確保。サッカーでタイトルがかかった緊張感のある試合は時に膠着状態に陥る。それを打破し、勝利に導こうとして投入されるスーパーサブは「らしい働き」をする。それも相手を分析した上で弱点を見極め、決定的な仕事ができる助っ人。縁ができたのは岡野の熱意と人柄なのだろう。

(敬称略)

勝つ
中小企業のものごと

PVA使い「本物感」実現